

研究題目

通常学級で学ぶ、特別に支援が必要な生徒の変容を  
三つの視点から考える

目 次

- I 研究のねらい
- II 研究の経過と内容
  - 1 対象生Aの紹介
  - 2 Aを支える支援会議
  - 3 三つの視点からAの変容に迫る
- III 実践を振り返って(成果と課題とその後)

長野県上田市立第六中学校 教諭 大谷 公人



## I 研究のねらい

小学校で特別支援学級に在籍していたAは、障がいによって自分をコントロールする力が不足しているため、様々な問題を起こしてきた。そのAが本人と両親の希望で、中学校進学と同時に私が担任する通常学級で生活することになった。障がいを持つ生徒が通常学級で生活する場合、特に感情のコントロールが苦手なAの場合、他の生徒や職員とのトラブルが起きることが予想される。そのトラブルが重なると、学級崩壊を起こしたり、生徒や職員が精神的に追い詰められたりすることにつながると考えられる。そこで、Aを担当するにあたって、先人たちの教育実践や私自身の過去の実践から学んだことから、次の三つに視点を置いて実践すれば、Aが落ち着いて学校生活を送れるのではないかと考えた。

- (1) 受容的な職員集団づくり
- (2) 受容的な学級集団づくり
- (3) 個別の支援

その結果、中学3年生の現在まで通常学級で生活しているAは、入学後から様々な問題を起こしたが、現在では大きく変容を遂げ、高校進学を目指すまでに成長している。

## II 研究の経過と内容

### 1 対象生Aの状況

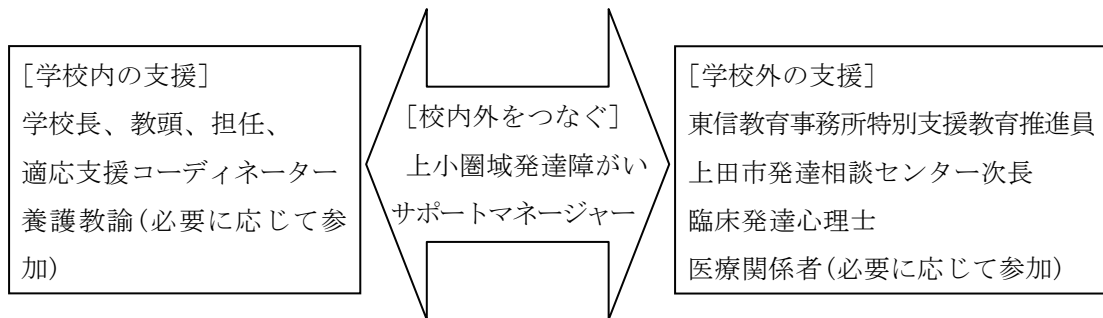
Aは11歳の時に広汎性発達障がいと診断され、服薬をし、定期的に診察を受けている。小学5年生から特別支援学級に入級したが、給食はそれまでと同じ学級で一緒に食べていた。特別支援学級では教室にいても落ち着いた状態で学習するということがなかなかできずに、校内を徘徊することが多かった。日々徘徊しながら、校内や職員室などで、自分が気になった物に触り、学校や個人の物を勝手に持ち出すこともあった。その行動を何とか抑えようと常に職員がついたこともあったが、その行動を抑制すればするほど興奮して暴れることもあり、体が大きく力も強くて、手が付けられずに警察を呼んだこともあったという。また、同級生に刃物で切り付けようとして、間一髪という場面もあったそうだ。

このような状況にあったので、両親はたびたび学校に来て懇談したり謝罪したりしていたが、両親は本人の特性を理解せず、枠にはめようとする学校の対応にも問題があると感じていたようである。一方、学校では、両親のAに対する愛情不足の対応に問題があると感じており、学校と両親との間に距離ができてしまっていた。

### 2 Aを支える支援会議

小学校時からサポートマネージャーら外部の支援者と両親を交えての支援会議を継続していたが、思うように効果は上がっていなかった。中学校入学後は、その支援会議を継続しつつ、さらに学校長と適応支援コーディネーターや養護教諭を加え、

より多面的な視点からAの言動をとらえるようにしてきた。



支援会議には、毎回Aの両親がそろって出席し年に10回ほど行った。そこでAの言動の裏にある行動原理やAの言動をどう解釈するかなどについて話し合い、多くの示唆をもらい指導に生かすことができた。

### 3 三つの視点からAの変容に迫る

#### (1) 視点1 受容的な職員集団づくり

受容的な職員集団とは、生徒の言動についてすぐ批判的にとらえたり、現象として現れる言動だけを指導したりするのではなく、まず言動を受け入れ、その言動を行う生徒の立場に立って言動の意味を生徒と一緒に考え指導していく、という指導方針を共通理解している集団である。職員の価値観が多様化する中、この指導方針は生徒との時間をかけた関わりと生徒理解が必要であり、そのような職員集団を作ることは難しい。いくつかの事例を紹介する。

##### ① 消火器事件

Aは顧問の教員と面識があるソフトテニス部に入部した。テニスは好きで張り切っており、ある日の朝、部活動開始時刻前に部室のカギを職員室に取りに来た。しかし、時刻が早すぎるのでB先生が断ると、職員室のドアをドンドンと叩きだした。そのうちにドアの上のガラスも棒で叩きだした。それを注意するがまったく聞く耳を持たずに止めない。叩く、注意される、ということを繰り返すうちに段々に興奮してきて、ついには近くの消火器を持ち出した。B先生は職員室にいた職員に声をかけAを取り囲んだ。するとAは持っていたカッターを見せた、という事件があった。その場は、興奮するAに対して穏やかに声をかけ続け、Aの興奮を収めることができたため大事には至らなかった。

この事件は、職員の対応とAの反応の仕方を、多くの職員が実際に見ることができたので、「Aに対しては、ルールを守ることは大切であるが、Aの場合は興奮させない対応を最も大切にしていこう。」という職員の共通理解ができた。

##### ② コールドスプレー事件

Aは校内をよく徘徊し、研究室に入ってはいろいろな物を触って歩いた。どの研究室でも「触ってはダメ」という対応はせず、危険な物や秘密文書等は除き、

触っていても軽く注意する程度にして対応した。そのような折、体育研究室にあったコールドスプレーをAが持ち出して使い切ってしまったことがあり、それを両親に連絡して弁償してもらうことになった。Aは翌日新品を持参したが、渡そうとしない。早く渡すように催促すると「1回使っていい？」と言うので許可した。すると一度使って「いい匂いだ。」と言ってすぐ渡してくれた。「弁償したものを使うのでは反省の気持ちがない。」と言ったのでは、Aとはやっていけない。せっかくの新品なのだから、誰だって一度は使ってみたいと思うだろう。Aはその欲求をおさえられない子なのだ、というとなえ方をして、そういう時は使わせればよいと考えた。コールドスプレーの持ち主である体育の教員も怒ることなくAの行動を見守った。

### ③ ウインドブレーカー事件

冬場になり寒くなってきたある日、Aはウインドブレーカーのズボンを履いて学校生活を送っていた。指導しても言う事を聞いてくれないだろうとは思っていたが、「ダメだよ。」と軽く指導した。他の職員も一声かける程度でしつこく指導はしなかった。Aは「いいの。」と言ってまったく着替える様子ではなかった。他の生徒ならしつこく言ってその場で着替えさせるところだが、それをやれば、本人が興奮して暴れることは目に見えていたので、見守ることにした。すると清掃後に私の所へわざわざ来て、「ズボンを忘れたからウインドブレーカーのズボンを履いていました。」とウインドブレーカーを下げて見せながら報告をしてくれた。きまりに合わせる強い指導ではなく、見守ることこそが本人から申し出たくなる気持ちを作ったのではないかと感じた。

## (2) 視点2 受容的な学級集団づくり

1年生の学級編成では、同じ小学校から入学してAに影響されないと考えられる生徒や、Aと一緒に地元で太鼓を習っている生徒で編成する等、できるだけ配慮をした。また2年進級時の学級替えにおいても、1年生に引き続き私が担任し、次のような学級を目指して学級づくりの方針を立てた。

- ・一人一人の個性が大切にされ、学級の中で個人個人の存在感がある学級。
- ・欠席した人や消極的な人、気が弱い人などに対しても、温かい言動ができる学級。

このような受容的な雰囲気のある学級を目指した学級づくりを行った。いくつかの事例を紹介する。

### ① 1年生2学期の授業中の事件

隣の席の女子Dの左腕と左太ももをつかむ事件が起きた。Aは友人との距離感がつかみにくく、Aの中では、フレンドリーに接しふざけているつもりだった。しかし、Dにとっては耐えられない事であり、彼女の訴えにより事件が分かった。すぐに二人を呼んで面談した。AはDが泣きながらそこにいるのを見るとすぐに事の重大さを認識したようで、終始無言であった。事実を確認し、双方の両親に連絡をした。Aの母は本人に「中学生になったのだから、異性に対してそういう

行いをしてはいけないのだ。」と諭し、すぐにDの母に謝罪をした。私からの連絡にDの母は「Dが大人になった時に、嫌な事をされたらそれを『イヤ』と言える事が大切であり、今回はその試練の場だと思います。だから今後の対応は先生にお任せします。」と言って、Aの両親の謝罪を受け入れ大きな問題にしなかった。今まで積み上げてきた両親との信頼関係や、Aに対する対応の積み重ねで理解が得られたと思った。

両親の対応は終わったものの、A本人に対する指導は十分とは言えなかった。Aの性格を考えて指導を躊躇していた部分もあった、そんな時、Aがこの事件で溜まったストレスを発散している様子を他の生徒から知らされた。次のような生活ノートである。

「Aがおこられたみたいでイライラしていました。それで、マスキングテープに『人をいじめてやる死』や『人を殺す!』『いじめまくってやる』など人を害する様な言葉だったり絶対に言ってはいけないことがかかれています。けどその他に『テニスをがんばる!!』と。テニスには力を入れてがんばりそうですね。机の引き出しに貼ってました。みんなが帰ってから見たりしてください。」Aは『これぼくの目標だから』と言ってました。」（原文のまま）

さっそく机の引き出しを見て「テニスをがんばる!!」に救いを感じた。また、今まではストレスを発散する方法として暴れたり物を壊したり刃物を出したりしていたのが、「書く」という事を選択できるようになったことにAの成長を感じることができた。

この生活ノートの記述を知っていたので、翌日私はまったく普通にAに接した。午前中はAも事件を引きずっていたようだが、午後にはいつもどおり私のいる研究室に来るまでになった。Aを見守る生徒の生活ノートに助けられた事件であった。さらに、事件直後には謝罪をしなかったAであったが、後日、謝罪の手紙（「ごめんなさい」と書いてあった）をDに渡した。その後の教室には、何事もなかったかのように二人で勉強を教え合う姿があった。数日後、Aの机の引き出しのマスキングテープを確認すると、左側の半分（『人をいじめてやる死』や『人を殺す!』『いじめまくってやる』）がいつのまにかなくなっていた。

## ② 2年生2学期 ―2度目の消火器事件と大切な「わすれもの」―

夏休みが明け、文化祭で行うミニ運動会の種目決めの時間に次のような出来事があった。希望する種目を立候補で決めていたときである。Aは「2人3脚」に元気よく挙手をして立候補した。2年生になり、話をする友達も増えたので、きっと一緒にやってくれる人がいると考えたのだと思う。しかし、一緒にやってくれる立候補者はいなかった。種目決めは進み、結局Aの相手は決まらないまま、

生徒全員の種目が決まってしまった。その結果、他の種目と掛け持ちで2人3脚を行う人をジャンケンで決めることになった。そのときAは教室最前列の自席を離れ、教室後ろの女子の席に行った。自席ではいたたまれなくなったのだろう。ジャンケンの結果、一緒に組む相手はEに決まった。そのときEは皆に聞こえるような声で、「ぼく、元々やりたかったんだ。」と明るく話しAをフォローした。しかし、Aにとっては自分の学級内での位置が明確になった辛い時間であった。

その日の放課後、この出来事で寂しくなったAは、職員室に来て教員と話をしたり、机上の物をいじったりしていた。下校時刻になったので私が「そろそろ帰りなさい。」と声をかけたが、机上の物を持って離さない。それをしかると、Aはそばにあったパソコン教室のカギと配電盤のカギを持ち出して職員室を出た。それを追いかけてつかまえて、パソコン室のカギを取り上げ、運動会の種目決めの時のEの気持ちを考えるように言った。しかし、次は消火器を見つけそれはずして持ち出した。持ったまま下駄箱に行ったのでそこで消火器を取り返し、いっなくなきつい言葉で指導をした。Aは「どうせダメだもん。」などの捨てゼリフを残して帰って行った。Aはこの件が心に引っかかって、その後の体育の授業でのミニ運動会の練習には1度も参加しなかった。

そんなとき、Eが心身に不調をきたして、突然学校を休み出した。欠席は1週間連続した。そんなある朝、「わすれものをしたので遅れて行きます。」とAが学校に電話をしてきた。それから1時間後、Aは休んでいたE（忘れ者）を連れて登校して来たのである。その事をクラスの級友たちが賞賛し、Aの優しい気持ちを全員が知ることとなった。その次の日、登校してきたEを満面の笑顔でAは迎えた。Eはその後も毎日元気に登校し、ミニ運動会当日、2人は見事に2人3脚で走った。Eの温かい言動がAの優しい行動につながった。Aのよさを職員も生徒も発見した出来事であった。

### ③ クラスの生徒への話

2年生の2学期から遅刻と欠席が増えてきた。Aが不在の時に学活で次のようにAの話をした。「友との関わり方は未熟です。でも、クラスのみんなどと一緒に学習したり生活したりしたい、と本人は願っている。」その翌日、ある男子の生活ノートには次のような記述があった。「今日は先生がAの話をしていて、ぼくの妹もそんな感じなので、そういうことを人よりは理解しているので大丈夫です。たぶん、他のみんなも分かってくれると思うので大丈夫だと思いますよ。」

また、折に触れてAの人柄や言動の意味を生徒に話してきた。欠席連絡用のカードについて次のように話した。「誰かが欠席するとAは同じ班でもないのに、たくさんメッセージを書いている。そういう友達思いの所がある。逆に、Aが欠席したのにメッセージが少なかったら寂しいと思うよ。だから書ける人はたくさん書いたらどうだろう。」

#### ④ 生徒たちの力で修学旅行に参加

2年生の2学期後半から不登校状態になっていたAを修学旅行に参加させるために、生徒にも話をして理解を求めた。一緒に行くメンバーはAの希望する人と一緒になれるようにした。Aは男子2名(内1名はE)を指名し、2人とも了解した。女子はAに理解ある3人が同じ班になった。その結果、Aが休み始めたら、同じ班員の女子が迎えに行き連れて来たり、「LINE」(無料通話アプリ)で学校の様子を報告したりして、修学旅行に向けて行動した。同じ班のFは、料理好きなAの性格を考え、修学旅行の朝食としてサンドイッチ作りを依頼して参加させようとした。修学旅行当日、Aは前日の夜12時に寝て、早朝3時に起きて1時間かけてサンドイッチを作り、修学旅行に参加した。

Aは修学旅行後再び登校しなくなった。しかし、Fは夏休み中に学校で行う学習会にも一緒に行こうと誘い二日間参加させた。Aは隣に座ったFのノートを見ながら勉強をしていた。



(写真右。Aも一緒に勉強している様子)

その頃のFの生活ノート

「同じ小学校ですずっと苦手な存在で関わりたくない人だったのに、何で自分からかまうのか面白くて笑ってしまいます。」

そのFは以前と性格が変わり、周囲と仲良くできたり、気をつかったりできるようになった。それは美術部に所属しているFの美術作品にも影響を与え、「作品が大胆になりとても良い表現ができるようになった。」と美術部の顧問が作品の変化を教えてくれた。

### (3) 視点3 個別の支援 —母親の変容が本人の変容に—

学校生活を通してAの心を育てていくのと同時に、両親の不安な気持ちに寄り添い、両親が学校と同一歩調でAに接するようになっていくことが大切である。そこで、個別の支援は本人に対する支援以上に、両親に対する支援が大切であると考え、学校では小学校時代から支援会議を通して継続的に支援してきた。しかし、両親の教育方針はなかなか一致することはなかった。母親はAの言動に対して批判的であり、父親は許容する傾向があった。子育ての前面に立っている母親と、仕事が忙しく、接する機会が少ない父親という違いによるのかもしれない。それが次のような出来事をきっかけに大きく変わっていく。

#### ① 母と子の衝突

自己理解が進み、自分の学級での位置が段々に分かって来た事が理由だと考えられるが、Aは2年生2学期後半から登校を渋るようになった。そして2年生の3学期には完全な不登校状態になってしまったのである。しかし、支援会議では



それはAの成長としてとらえるという指摘を受けた。その指摘に担任である私は大分救われた。

一方で、母親はこの頃「学校へ行かないのに朝や昼ご飯を食べているのは納得できない。不登校なら徹底的に家に閉じこもって何もしない不登校をしてほしい。」と発言しており、Aの言動に不満をもっていた。このような母親とAの言動とが激しく衝突する出来事が2年生の12月28日に起きた。

母親が夕食を作っていた時にAは手伝わないでゴロゴロしていた。それを見て頭にきた母親が「手伝わないなら食べるな。」と言った。そこでAは自分で料理を始めた。しかし、それが母親は気に入らず、「自分で買ってきた食材じゃないんだから使わないで。」と言って本人から食材を取りあげて冷蔵庫にしまってしまった。Aがそれを引っ張り出して作る、またしまう、という事を2回ほど繰り返すと、Aは頭に血がのぼり2階に上がって自分の部屋をぐちゃぐちゃにし出した。さらに、隣の和室にあった母親の衣類もタンスから引っ張り出して散乱させた。止めに入った母の腕をつかんだので、母親の腕は赤くなってしまった。父親が帰ってくると、自室に入って毛布をかぶっていた。どうしようもなくなった母親から担任に連絡があり、担任が駆け付けた。

この出来事を通して、A本人への指導以上に母親への助言の大切さをいっそう痛感した。ただ、小学校時代から支援会議では母親に助言を続けていたが、母親はなかなか自分を変える事ができないまま現在に至ってしまっていたようだ。しかし、この出来事は母親の心に響き、この日を境に徐々に自分を変える意識が育っていく。2年の3学期から3年生にかけては、修学旅行に参加させる、という目標を立て両親にも協力をしてもらうことにした。母親は履いていく靴を一緒に買いに行ったり、荷物を用意してやったりしながら本人との関係が改善していった。いつ登校しても大丈夫なように、その日の予定の書き置きを毎日続けた。学校の予定は同じクラスの母親がメールで毎回送ってくれていた。3年生の4月に母親から来たメールは、以前の言動とまったく違っていた。「今日は、子どもにごまをすりながら、太鼓の定例練習会に連れ出しました。」以前と違って我慢できる母親に変化し、母親とAとの関係はととても良くなった。

## ② 本人の得意な「太鼓演奏」で登校刺激を

修学旅行に参加した後は再び欠席が続いた。そこで、Aの習っている太鼓演奏の発表機会を文化祭の開祭式で作る計画を立てた。太鼓の練習を通して、Aと関わりを持つ生徒と職員を増やしたり、自信を持っていることの発表を通して自己肯定感を高めたりした。Aと同じクラスからは3人が参加し、7月半ばから毎週1回程度、夜7時から太鼓の練習を行った。私も参加し、そこでAと接する時はお互いにいい雰囲気の中で接することができた。職員からもAの違った面を褒めても

らえた。文化祭当日、Aは早朝から登校し、オープニングの太鼓演奏を見事に行った。

### ③ 進路選択に向けて

3年生の2学期後半、突然、母親が勤めを辞めることになり、登校していないAと毎日一緒にいる生活が始まった。母は「今までAとじっくり付き合ったことがなかったから、しばらくの間観察してみます。」と話し、Aとの時間を楽しむようになった。親子で買い物に行ったり、高齢の祖母の手伝いをしたりして毎日を二人で過ごした。現在のAの状況を考慮して母親は、「3月末に進路が決まっていなくても良い。この子は1年間進学しないでじっくり自分の進路を考えるのも良い。」と話した。A自身も進学にも就職にも興味を示さずにいた。しかし、ちょっとした親子の会話の中から通信制高校に興味を持ち出したAは、インターネットで調べた上田市内の通信制高校へ進学をしたいと言い出した。母親との日常会話が増えた結果、親子で進路について自然と話題になり、気持ちが向いたのである。この機を逃さずに、高校と連絡を取りいくつかの通信制高校を見学に行くことにした。3月までに進学先が決まるかどうかは不透明である。しかし、親子が同じ方向を向いて歩み出している現状をみると、今後いくつもの困難があっても良い方向に乗り越えられると確信している。

## Ⅲ 実践を振り返って(成果と課題とその後)

### [成果]

- 1 「受容的な職員集団づくり」「受容的な学級集団づくり」「個別の支援」の三つの視点を大切にし、意識しながら実践を続けてきた。その結果、Aが変わり、母親も変わり、両者が同じ方向を向いて歩み出すまでになった。また、両親で大きく違っていた子育ての方針も一つになり、同じ方向でAを育てていくようになった。卒業写真撮影のために母子で登校した二人が、横に並びながら帰って行く様子が二人の良好な関係をよく表していた。
- 2 Aが事件を起こす時は、その事件の背景がずっと前の出来事に由来しているという事が多い。事件とその背景とのつながりがつかめないのが、私達にとっては突然の事件発生というように思えてしまう。しかし、話をよく聞いてみると、Aなりのこだわりや理由が存在するのである。そういうAとの対応を通して、他の生徒への対応もじっくり考えられるようになり、私の指導力の向上にもつながったように思う。
- 3 正面切ってお礼を言う事は苦手なAであるが、自分の気持ちを表すことがある。2年生の1学期終業式の日給食の出来事である。Aは給食が大好きで、牛乳を3本、豆腐を5個も友達からもらって喜んでいて、そのAが突然、「先生、牛乳あげる。」と自分の牛乳を私の机の上に置いた。今までの苦労が少しだけ吹き飛んだ。

### [課題]

- 1 知的な理解は平均的と判断されるAであるが、授業をきちんと受けていないことから知識理解の定着や基礎的な技能の習熟が不十分であり、学力をどうつけていくかが大きな課題である。進学意欲が持続した場合は、中学校への登校を促し、個別指導を行っていききたい。
- 2 通信制高校への進学意欲が継続し、4月から新しい環境に入ることが出来た場合は、高校入学後も支援会議を継続したり、中学校での指導記録をスムーズに引き継いだりするシステムを作る方策を考えていく。進学意欲が途切れてしまった場合は、あわてずに親子の対話を基にして進路意識を再度醸成していききたい。

### [その後の進展]

Aは進学意欲が継続し、通信制高校に合格した。高校側とは入学前に移行支援会議をもち、中学校での指導記録を引き継いだ。Aは高校1年生となり週1回の登校を続け1学期を過ごした。ただ、当初は意欲的だったものの、1学期後半になりやや登校意欲がなくなってしまったという連絡を受けている。両親や高校とも連絡を取りながら、引き続きわずかな力ではあるが支援を続けていききたい。